

病院で受けた患者の検査データやカルテなどの医療情報を、インターネットを通じて診療所が閲覧できるネットワークシステム「あじさいネット」が県内で広がっている。2004年に県央地区で始まり、現在では長崎市を含め情報提供病院は10カ所、利用する診療所は126カ所に拡大。今後は離島や佐世保地区でも導入されるほか、病院同士でも閲覧できるようになるなど機能面も充実。先進事例として全国からも注目されている。

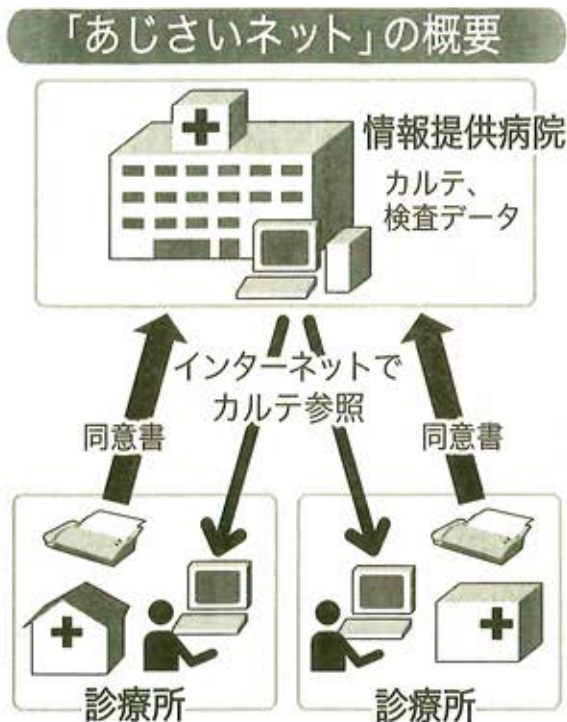
# 病院と診療所 —IT使い連携

## ▼ダブルチェック

あじさいネットは、NPO法人「長崎地域医療連携ネットワークシステム協議会」（会長・小尾重厚大村市医師会長）が大村市の国立病院機構長崎医療センターの電子カルテを閲覧するシステムとして04年10月からスタート。初診の患者でも病院で検査・治療を受けた経験がある場合、診療所の医師が患者の同意書を病院にファクスで送信し登録。診療所のパソコンから、その患者に関する病院の電子カルテや検査データ、画像を

## 「あじさいネット」県内で拡大

閲覧できる仕組み。従来は、かかりつけ医でも病院に直接出向いて閲覧する必要があったが、診療所にいながらにしてリアルタイムで入院患者の経過を観察することも可能。重複処方や検査を避け、適切な治療を提供するほか、患者の状態を病院・診療所双方でダブルチェックできる利点もある。これまでに約1万1千人の患者が登録されているという。



県内外から約200人が参加した第1回あじさいネット研究会  
■長崎市茂里町、県医師会館

システムは電子カルテ導入の動きに伴って全国で開発されたが、そのほとんどが十分機能していない。病院主導で周囲の診療所を囲い込むために開発・利用する例が多く、広がりがなかったという。

これに対し、あじさいネットは地域医療の主体をかかりつけ医と位置付け、病院情報の開示により診療所機能をサポートすることを重視。診療所から病院の情報を閲覧する一方、通行のシステムにしたことで、データベース構築などのコストを10分の1に抑制。操作面も簡便にし、導入しやすとした。機能面も充実させており、複数の病院を受診している患者の場合、一つの病院にアクセスすれば他病院の情報も閲覧できるという。

### 情報提供病院

(5月15日現在)

国立病院機構長崎医療センター、大村市立大村市民病院、長崎大学病院、光晴会病院、十善会病院、日赤長崎原爆病院、長崎市民病医院、済生会長崎病院、井上病院、聖フランシスコ病院

## 10カ所が情報提供 先進事例、全国から注目

現場も期待の声  
これらが奏功し、情報提供病院は長崎医療センターに続き大村市立大村市民病院、09年からは長崎大学病院など長崎市内の病院も参加し計10病院に増加。年内には長崎記念病院、日本海員救済会長崎病院、上五島病院も参画する予定。診療所側も大村市、長崎市は医師会単位で入会し普及を推進している。

今年5月、システム運用開始5周年を記念し長崎市で開かれた「あじさいネット研究会」。仕組みや役割をあらためてアピールするため同協議会が初めて開いたが、県外からも約200人が参加し関心の高さを示した。

事例発表で登壇した、わたべクリニク（長崎市元船町）の渡部誠一郎院長はあじさいネットで入院患者の経過を確認して検査結果の異常を見つけ、病院に電話し処置を要請したことを報告。「かかりつけ医として病院主治医とともに診ていける真の病診連携。患者の立場に立った健全で安心な医療が実践できる」と述べた。大村東彼薬剤師会の諏訪敏幸会長は「薬局窓口でもあじさいネットを活用することで患者に信頼してもらえる。将来の薬剤師像、業務を変えるかもしれない」とした。

特別講演で登壇した内閣官房情報通信技術（IT）担当室の野口聡参事官は、政府の医療分野へのIT戦略を解説する中で、「先進的な取り組み事例として全国で紹介していきたい」とあじさいネットへの期待を述べた。（小出久）